



司牧者がリレー形式で若者たちにぜひ読んでほしい書籍を紹介し、青年たちの読書感想文を掲載する連載。今回は、山本英明神父(阿倍野教会)が担当。

山本英明神父から 29冊



『海と毒薬』(遠藤周作著、新潮文庫、1960年発行、税込 407円)

本が嫌いで、一冊の本を読み切ったことはありませんでした。←次の文を読んでも、設問に答えなさいという類の試験は、文章を読まず、いい加減に設問に回答をして、乗り切っていました。

高校3年の夏に、『海と毒薬』を問題文とした過去問を解く機会があり、なぜかその時、はじめて本文を読んでもみようかという気持ちになりました。そしてこの文章に引き込まれました。この筆者の考えていることは鋭く、「すごいな」と思ったのです。こんな深いことを考えている人がこの世にいるなら、この人のことをもっと知りたいと初めて思いました。その後

遠藤周作だけでなく気になる作家の本を読むようになりました。

その過去の解説に、遠藤周作が、カトリック作家であること、カトリックについてすごい宗教なことも思いました。これが私のカトリックという宗教との最初の接触です。そして、その日の学校帰りに、『海と毒薬』の文庫本を購入し、その夜、寝ずに読み切りました。これが初めて、最初から最後まで読破した一冊です。また翌日、学校の図書室で新約聖書をはじめ手に取りました。

カトリックってすごいのかも勘違いした点は、記憶がいまいですが、登場人物の一人が、小学生の時、病気で休んだ級友のために配布物をもっていく個所で、自分はこの病気の級友のことを思っていたのこ

とではなく、ただ、それをするので周りから、先生から賞賛を受けたら、先生という子どもながらのどす黒い心の動きを告白した部分です。こんなことを白状できる宗教ってすごいなと思ったら、実際は、なかなか他人を踏み台にして、賞賛を受けて喜んでいるケイスが多いと今は、カトリックではなく、遠藤周作が深かったのだなと思つています。実は、聖書を読めば、その白状こそ悔い改めなのですが...

『海と毒薬』は短く、日本語も読みやすいので、紹介しると言われるならこれです。一番、読んで欲しいのは聖書です。

次回は、英隆一朗神父(六甲教会)です。



諸宗教対話委員会 神道との対話 廣田神社訪問



3月18日、兵庫県西宮市に在る、県内で最も古い神社の一つとされる廣田神社を訪ねた。諸宗教対話委員会の活動は、勉強会と宗教施設訪問が含まれる。新型コロナウイルス感染症のため、施設訪問は中止を余儀なくされてきたが、収束に近づきつつある今再開となり、カトリック、プロテスタント、そして他の宗教の人びと約30人が集まった。

立派な鳥居をくぐると嶋津宣史(ねづのり)が私たちを笑顔で迎え、神社本殿に案内してくれた。そこでは神職が祈りを捧げ、その後カトリックから聖書朗読、詩篇、主の祈りを含む祈りの交換が行われた。次に、委員長(記者)

は廣田神社の西井璋(あき)宮司に挨拶し、大司教前田万葉(まなは)枢機卿の代理として教皇庁(こうきやう)諸宗教対話評議会から神道への新年メッセージを届けた。宮司からはお礼と歓迎の挨拶があった。

その後、ホールで嶋津先生が神道と自然の関係



神道と自然の関係について話す嶋津先生

について話した。先生は2018年以来、当委員会の活動に協力して、今では委員会の良き友人となっている。先生のその温かい人柄に触れ、皆は興味深い話に聴き入った。講演は参加者から興味深い質問を引き出し、有意義な対話を生み出した。

この活動が多くの人役に立つことを願い、次のイベントで多くの人と会うことを楽しみにしている。

(文 諸宗教対話委員会 委員長 ロッコ・ビビアーノ神父)



ラジオ 信仰の時間

新たにされた人びとの生活 4月担当(4月16日放送分)

大久保 武神父 (相生教会)

復活節では、復活されたイエス様と出会った弟子たちのその後を伝える使徒言行録という書物が、ミサでよく取り上げられています。今も世界で広く知られているペトロやパウロを中心に、どのような宣教が行われていったのか、その結果として世の中がどのような反応を示したのかが記されていて興味深い内容となっています。そこで今回は、新たに信仰者となった人びとの姿についてお話ししてみたいと思います。

エルサレムでは、ペトロがイエス様の正しさを聖霊と共に淀みなく宣言したことを受け入れた人びとがいました。実際に目の当たりにしたわけではありませんが、ペトロの声の自信や揺るぎない表情、それらから見出せる聖霊の働きを感じたのだと思います。イエス様の十字架の出来事はエルサレム中に知られていたでしょう。あの敗北にしか見えない出来事がまさか復活へと繋がり、イエス様こそが主であると神様

が公に示した事実は非常に衝撃的であったと思われます。人びとは自らの過ちを悟り、信仰を新たにしたいと望み、ペトロにどうすれば良いのかと相談します。そこでペトロは「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい」と告げました。復活されたイエス様が命じられた宣教の働きをさっそく実行しています。マルコによる福音書でイエス様は「信じて洗礼を受ける者は救われる」と言われていますが、ペトロの言葉を見てみると、救いとは一つに罪の赦しであると受け取ることができます。イエス様の名による洗礼は赦しが現実となるばかりでなく、イエス様を通じた神様との新しい繋がりに至る、人間にとって根本的な儀式です。

人びとは、それからどのように過ごしていたのでしょうか。使徒言行録ではまず「使徒の教え、相互の交わり、パンを裂く事、祈る事に熱心であった」と書かれています。使徒たちはイエス様から受けたものを人びとに伝えているのであり、つまり使徒たちを通して人びとはイエス様の教えを聞いていました。

聞くばかりではなく、信じる者同士では共に励ましていたでしょうし、まだ信仰に至っていない人びとに対しては愛に基づいて支えつつ、根気強い呼びかけを続けていたのだと思います。

何より大切な事としてパンを裂くこと、つまりイエス様がお自身を与えられた最後の晩餐(ばんさん)の記念を忘れませんでした。信仰者としての行いは全て、

イエス様を由来として実現されていきます。今も私たちはミサの中でご聖体をいただいているのですが、まさにイエス様が心も体も一つになるようご自身を与えてくださっているのです。当時の人びとも、パンを裂くことを通してイエス様が常に一緒にいてくださることを確かめていました。

そして人びとは祈り続けます。祈りとは神様への信頼を確かめ、神様の望みに応えることを宣言し、その上で自分が具体的に望むことを言い表し、必要な恵みを願う一連の流れです。イエス様のように生きることがキリスト信者の目的ですが、イエス様が朝早くから祈っていたように、何を始めるにもまず祈りから入ることが大切です。

これらの土台の上に、新たな信仰者たちは皆一つになって全ての物を共有していました。ただ差し出せばいいわけではなく、イエス様と共にいる生活が深まるうちに、自分だけの物など何もないのだと悟ったのだと思います。イエス様は神様のために全ての人びとに心を開きました。私たちもそんな姿こそが最も正しく幸いな人生だと信じて、祈りの内に生きてまいりましょう。

毎週日曜日 5:50~6:00AM 放送
6月担当: 山口武史神父
ABC ラジオ (朝日放送) AM1008/FM93.3
スマホアプリの radiko でも聴けます。